令和元年度　第２回清水町みらい会議要旨

〇開催日　令和２年２月 26 日(水)
〇会　場　清水町役場３階　町長応接室

〇出席者(委員)
・岩崎　清悟　座長　(静岡ガス株式会社 取締役 特別顧問)
・中山　　勝　副座長　(一般財団法人企業経営研究所 常務理事)
・植田　勝智　委員　(ファルマバレーセンター　センター長)
・川村結里子　委員　(株式会社結屋 代表取締役)
・鈴木　誠一　委員　(株式会社エステック 代表取締役)
・長倉　一正　委員　(有限会社長倉書店 代表取締役)
・三船美也子　委員　(一般社団法人日本親子体操協会　理事)
・矢嶋　敏朗　委員　(日本大学国際関係学部 国際総合政策学科 准教授)

清水町の将来像について、各委員のイメージを交換する中で、次回以降のテーマ探しを行った。

１　若者が集い暮らすまち

・人口の社会増を促す上で、まずは「関係人口」を増やすという考え方がある。たとえば「域学連携」によってまちと大学が連携協定を結び、日大や首都圏の学生が清水町に入ってくる仕組みを作れないか。町民が熱く語り、若者がおもしろそうと感じるような内容がよい。

・高等教育機関があるといい。清水町で学んでいる間に、高齢者を支援する学生ボランティアとして活動するなどの機会を提供できるといいのではないか。

・若い世代の人たちの意見を聞ける機会を作り、どんなまちだったらここを自分の社会としてやっていけるかというヒアリングが必要。

・今の大学では、外に出て実践し、それを学問に落とし込む「実学」が重視されている。大学生に実践してもらい、行政とディスカッションできる場づくりなどが考えられる。

・自分が暮らしている地域を知ることで、その地域をより愛せるようになる。義務教育の中で、自分たちのまちの地理や歴史、自然を学べるとよい。

２　若者が働く場づくり

・ヤングファミリーを増やすには“仕事場”が必要。柿田川の観光面での活用はまだ十分ではないので、柿田川のＰＲを進めながら、新たな仕事場もつくれるのではないだろうか。

・何か目立つことが必要。“目立つ”ために、柿田川の水や名前をなんとか活用で

きないか。
・三島で高校生や大学生と企業の方々が集まれる場づくりをしている。学生には自主的に参加してもらっている。大人の都合で巻き込まれる事には学生たちは冷めているので、自主的に参加できる余白が必要。こういった大人と出会える接点をまちぐるみでつくり、暮らし方や働き方の面白そうなイメージ、わくわくするイメージを持ってもらったり、まちづくりに学生が参加できるような仕組みをつくってはどうか。学びがあること、チャレンジできることが大事。
・今の若者たちは地域貢献やボランティアに対する意識が高く、そういった思いをうまくキャッチしてあげられる土壌づくり、基盤づくりが重要。
・日本の所得格差が生じた大きな要因に、第二次産業、モノづくりの産業からサービス産業へのシフトがある。まちに賑わいは必要だが、若者の暮らしを考えたときに、もう少し付加価値の高い仕事を見つけていかないといけない。高付加価値産業をどう作るか。今ある企業を核にしてどういう集積を作れるかが重要。
・ベンチャー育成のために、都心から１時間という地の利を活かせないか。八王子には医療系の検査会社や製薬企業が多いが、東京から１時間弱かかるため、時間距離では勝負できる。
・国立遺伝学研究所にお勤めでこれからリタイアする方々を、しっかりと地域に留めることも一つの方策。先端的な尖ったノウハウを若い人たちに引き継いで、付加価値の高い産業に従事してもらうことで、注目を集められるのではないだろうか。
・柿田川を眺めて心を癒やすことができるような低層のラボを作り、そこに遺伝研のＯＢを引っ張ってきて技術を活かしてはどうか。ＡＩもどんどん発達しており、遺伝情報と臨床データを重ね合わせれば医療的な予測もできるようになってきている。そのあたりをヒントに、医療健康産業のベンチャー育成ができると思う。
・この地域には“医のネットワーク”があり、先端的な施設があるので、ラボがあってもおかしくない。そこに人を引き寄せられる可能性はある。

３　先端的な「実験都市」に

・学生のフィールドワークのテーマを提供できないか。そういう場として認識されれば、大学の先生方も自分の論文を書きに学生を連れてくる。清水町は静岡から１時間、東京からも１時間。東京の大学に声をかけるのもいいだろう。論文を見て、また人が集まる。大事なのはテーマだ。

・ＩＴや[※1]ＩｏＴ[※2]などは、若者に頼らざるを得ない。デジタルネイティブ[※3]たちの頭脳や技術、若者たちの才能を、地域の問題解決に活かすという考え方もある。こういったことを打ち出していけば、大学の先生からも学生からも、ここに足を運んでやってみよう、という人が出てくるのではないか。
・高齢化社会というたいへん大きな問題を抱えている。高齢者の方に健康で楽し

く暮らしてもらえる地域をつくるにはどうしたらいいか。このテーマに若者のチャレンジスピリットや発想を活かす。ＩＴや医学の面だけに止まらず、まちづくりも含めて若者にアイディアを考えてもらってはどうか。
・国の助成もあり「学校間連携」が流行っている。地域貢献も教員の重要な仕事なので、大学同士で連携して地域を対象に取り組みたい。
・インターンシップなどを通じて地域に就職させたいという面もあるので、大学間連携は非常に重要。
・どんなテーマなら若者が来たがるか、それは若者にしかわからない。若者自身にテーマを考えてもらうとよい。
・“実験都市”という考え方がいい。実験なので答えはない。いろいろな人を巻き込んでカタチにしていく。テーマは最大の問題である「高齢化」。そこに楽しく新しいチャレンジを仕掛けていくまちに、若者や研究者が入ってきて実験する。そしてこういうまちに向けたインフラ整備を行政に考えてもらう。
・真っ平らな清水町の土地は、高齢者が健康に過ごす上では適地だと思う。技術や若者の発想がそれをさらに際立たせる。
・首都圏の企業が地域に入っていって課題解決をしながら事業化するという動きが広がっている。こちらで全部用意するのではなく、チャレンジできる環境を整えることで、まちのコミュニティの熱量が上がるのでは。

４　高齢者が活き活き暮らすコミュニティ

・健康寿命延伸のためには、お年寄りが家の外に出ていくことも重要。学生と会話をしながら小学校や中学校の算数・数学、国語などに取り組む「学習療法」という方法がある。脳の血流を活性化し、認知症を抑えるというデータもある。また、目や耳、歩行機能が衰えると引きこもりにつながるので、週に 1、2 回でも柿田川周辺を歩いてもらったり、目や耳の機能が衰えた方には器具を紹介するなど、総合健康センターとも連携してまちぐるみで取り組めるとおもしろい。
・楽しんでやってもらうことがポイント。何歩歩いたらチケットが 1 枚もらえるとか、楽しんでやってもらわないと外に出てこない。競争やレジャーの要素を盛り込むとよい。
・公民館でのワークショップもいいが、井戸端会議の延長線のような、腹を割って、膝を詰めて話せる、知らぬ間にワサワサ人が集まってくるような場づくりもいいのではないか。
・高齢者のサークルには、同じ目的で集まるコミュニティの深さと適度なおせっかいが見受けられる。運動だけではなく、自分が活かされる場がたくさんあって、選べるような環境だと、学び続けたりしながら、生涯この地域で暮らしていきたいという気持ちが生まれると思う。
・コミュニティのあり方を見直さないと、高齢者にとって楽しいまちにならない。自治会中心のコミュニティだと、よそから来た人が入りにくい。増加する東京の高齢者を受入れるためには、ソフトだけではなくハードも含めて考える必要があ

る。
・町としてテーマを出すのはいい。「セカンドステップを楽しめるまち」「楽しく働けるまち」「学べるまち」など。外部の方々は知識もあるので、活躍できる機会を“見える化”するとよい。

※１　ＩＴ …「情報技術」のことでコンピューターやデータ通信に関する技術の総称。
※２　ＩｏＴ…モノに通信機能を搭載してインターネットに接続・連携させる技術。
※３　**デジタルネイティブ**…生まれたときからインターネットが身近にある世代。